

「キリスト教と国家」

原 誠
同志社大学神学部

1、いくつかの前提

国家と宗教 ヨーロッパ ひとつの王国にひとつの教会（領邦教会）

ヨーロッパにおける「政教分離」 セクト

アメリカにおける宗教分離、信教の自由 デノミネーション

ミッション・フィールドであるアジアにおけるキリスト教伝道の歴史的な性格

「国家と宗教」

「16 世紀の宗教改革以後の時代には、ヨーロッパの数々の国でプロテスタント諸教会が国家ないし世俗権力と結びついて体制的な教会となった。ルターの「二王国論」は、地上の教会を含む世俗の王国全体に対する法的・政治的な支配権を統治者に認めることになった。これが「領邦教会」。17 世紀、統治者はその領域内で、カトリック、ルター一派、カルヴァン派のいずれかを選択することを認める。啓蒙主義思想の拡大展開によって、19 世紀に多くの国で国家と宗教の分離「政教分離」、宗教的自由を保証する政策が進展。」（以上、「国家と宗教」（要約）『岩波キリスト教辞典』）

「二王国論」 「領邦教会」

ヨーロッパとアメリカの「キリスト教と国家」の相違

検討するための視点 考える 3 つの目 日本、欧米、アジア

文化摩擦、文化衝突、土着化、帝国主義、植民地主義、文明国、非文明国

普遍宗教、世界宗教であるキリスト教も、地域共同体、民族宗教化、排他性

キリスト教とは何か 「福音」 辺境、周辺、境界

2、アジアのキリスト教の事例

A、インドネシア

多民族国家、約 300 の民族、人口 2 億 6000 万人、

パンチャシラ「建国五原則」「多様性の中の統一」

国家が公認する宗教 イスラム、ヒンドゥー、仏教、カトリック、プロテスタ

ント、儒教

イスラム国教化運動に対して、政府は世俗国家としてキリスト教を保護

B、タイ

1932 年の近代憲法によって、国民には「信教の自由」、しかし「王室は仏教の守護者」

仏教国、南部地域はイスラムが多数派、

キリスト教 0.5 パーセント、歴史的には北部を中心に

少数山岳民族（約 85 万人）のなかで 40 パーセントがキリスト教、カレン、ラフ、モン、ヤオ、リス、アカの諸部族

その特徴「集団改宗」(Mass Conversion)

宣教師によって教育、医療、文字(アルファベット)、聖書の翻訳など文明化

C、ミャンマー

キリスト教人口 7.3 パーセント

1813 年、アメリカン・バプテスト教会のジャドソンらによって宣教開始

最初のクリスチャン、カレン族、1829 年に。1854 年にカレン語の聖書の翻訳ビルマ族以外のカレン、カチン、チン族などの少数山岳民族のなかで

「集団改宗」(Mass Conversion)

D、ベトナム、ラオス

1976 年、ベトナム戦争後の共産化 1991 年、政府による公認

ラオスでは、毎年、5000 人が受洗、現在の信徒数 20 万人

3、日本の歴史とキリスト教

2 度の「外圧」ペリーの砲艦外交による開国と太平洋戦争の敗戦による民主化

最初の「外圧」

「文明の梯子段」(鶴見俊輔) 脱亜入欧、和魂洋才、富国強兵、などの国是

明治政府、廃仏毀釈「神道非宗教」論、「大日本帝国憲法」下の「信教の自由」、「教育勅語」

文部省訓令第 12 号 (1899 年)、三教会同 (1912 年)、など

神権天皇制に基づく宗教国家・神聖国家、その崩壊

2 度目の「外圧」

戦後の民主化、国民主権、平和憲法、政教分離、信教の自由

日本のキリスト教の現況

4、ミッション・フィールドにおけるキリスト教受容(まとめにかえて)

「宣教」ケリュグマ(伝道、教育、奉仕)

「(中略)1960年代以降、個人的信仰の覚醒の色彩の強い「伝道」に代えて社会的ひろがりを念頭に置いた「宣教」という用語を意識的に用いる傾向もあるが、これは伝道と教会形成の重視と同時に、教会の社会に対する預言者的責任を顧慮する宣教理解に基づいている。その他、東北アジア宣教に関していえば、中国・朝鮮半島・日本にほぼ同じ欧米のプロテスタントの教派が伝道を開始しながら、その国の歴史・文化の違いやそれへの関与の仕方の相違などから、今日、各国での教勢や影響力に著しい違いがみられ、興味深い。」(金子啓一)

『岩波キリスト教辞典』

今もなおいわゆるキリスト教国はモデルか

それぞれのコンテキストの中におけるキリスト教

相対主義か？ 相対主義を超えるもの

デイヴィッド・ボッシュ『宣教パラダイム転換』(上・下)、2001年、新教出版社、他者と共なる教会としての宣教、ミッシェ・デイとしての宣教、救いを媒介するものとしての宣教、正義の追求としての宣教、エバンジェリズムとしての宣教、文化脈化としての宣教(Contextualization)、解放としての宣教、文化内開花としての宣教(Inculturation)、共同の証しとしての宣教、神の民全体の働きとしての宣教、異なる信仰の人々に対する証しとしての宣教、神学としての宣教、希望に満ちた行動としての宣教

「宣教」ケリュグマ(伝道、教育、奉仕)

「(中略)1960年代以降、個人的信仰の覚醒の色彩の強い「伝道」に代えて社会的ひろがりを念頭に置いた「宣教」という用語を意識的に用いる傾向もあるが、これは伝道と教会形成の重視と同時に、教会の社会に対する預言者的責任を顧慮する宣教理解に基づいている。その他、東北アジア宣教に関していえば、中国・朝鮮半島・日本にほぼ同じ欧米のプロテスタントの教派が伝道を開始しながら、その国の歴史・文化の違いやそれへの関与の仕方の相違などから、今日、各国での教勢や影響力に著しい違いがみられ、興味深い。」(金子啓一)

『岩波キリスト教辞典』

魚木忠一、「触発」

「クリエイティブ・マイノリティ」

『同志社神学部の韓国人留学生に関する総合的研究』、同志社大学神学部・メソジスト神学大学学術交流シンポジウム、李徳周監理教神学大学教授、2010年11月13日